

大豆栽培における栽植密度とコンバイン刈取収量の関係

～ 適切な栽植密度における増収効果の検証 ～

要約

県の指導では栽植密度を20本/m²としており、この栽植密度に近づけることにより主茎長が長く、最下着英位置は上昇しました。また、地際～15cmの着粒割合が減少することで、コンバイン刈取収量が増加しました。

研究成果の概要

1. 背景・目的

生産現場では省力化等のため大豆の播種量を減らし、疎植で栽培する場合があります。これにより最下着英位置が低下し、コンバインによる刈取ロスが増加している可能性があります。ここでは、栽植密度と最下着英位置等の関係を明らかにし、コンバイン刈取収量への影響を確認しました。

2. 内容

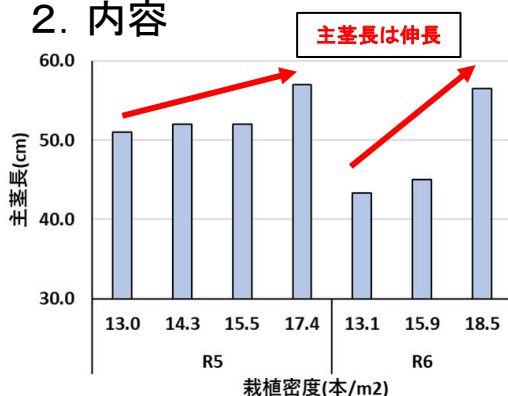


図1 栽植密度と主茎長

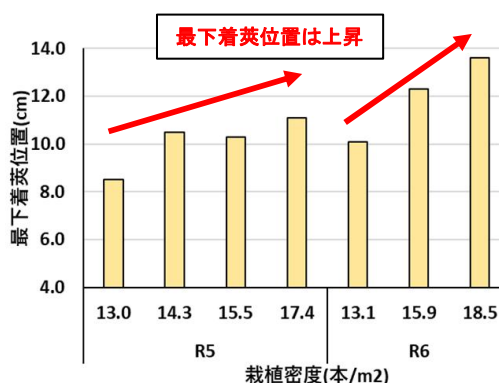


図2 栽植密度と最下着英位置



写真1 異なる栽植密度による個体の違い(左: 13.1本/m²、右: 18.5本/m²)

栽植密度が高いほど主茎長が長く、最下着英位置が高くなりました(図1、2、写真1)。

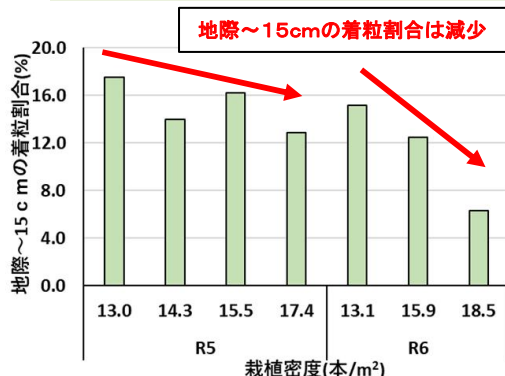


図3 栽植密度と着粒割合

栽植密度が高いほど、地際～15cmの高さに付く英は減少しました。(図3)。

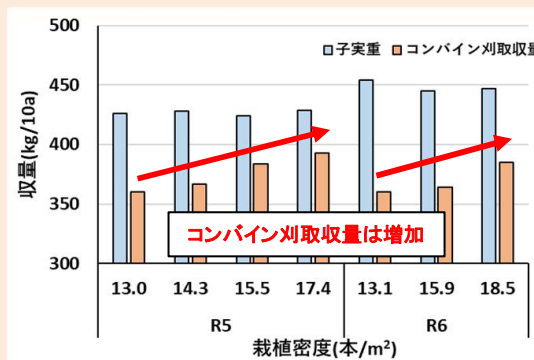


図4 栽植密度とコンバイン刈取収量

栽植密度が変わっても坪刈りの子実重はほぼ同等ですが、コンバイン刈取収量は栽植密度が高いほど増加しました。(図4)。

3. 活用等 適正な栽植密度で播種することで、増収が見込まれます。

関連情報

汚損粒を避けるための収穫適期は「大豆おおすずのコンバイン収穫技術」(H10指導参考資料)で示されています。